

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

育てる～オタマジャクシ～／NPO法人なのはな あおぞらキンダーガーデン

子どもたちが、「生き物と出会い、大切に育て、そして別れる」この過程で、どのようなことを大事に育み、どのような援助をしていますか？

園の特長を生かして、生き物との関わりを工夫し、家庭や専門家との連携を大切にしたり、子ども自身がいろいろ調べたりしながら、オタマジャクシを大切に育てることで、「科学する心」が育まれた実践をご紹介します。



○ モリアオガエルとの出会いで／4歳児

✿ 卵との出会い 6月上旬

- 山に宝探しに行く道中で、水槽の上に垂れ下がる木に、カエルの卵がぶら下がっているのを保育者が発見。みんなに「カエルの卵があるよ」と伝える。

✿ モリアオコさんからの手紙

- 珍しいカエルの卵であるということを知った保育者は、「子どもたちの関心を膨らませ、楽しく卵と出会える方法」を考え、葉っぱの手紙を作り、園のポストに入れた。
- 葉っぱには「わたしのこどもをたすけてください たからをあげた、もりあおこより」と書いてある。すると、「（カエルの卵があるところに）行ったことあるよ！」「見た見た！」と思い出した子どもたち、カエルの卵の所まで行ってみることに。



✿ アマガエル?? 図鑑で調べてみよう

- 子どもたちは葉っぱの手紙の絵を見て調べ、手紙の絵と同じ卵の写真を見付ける。そこには、「モリアオガエルの卵」と書いてあった。

✿ カエルのおじさん現る 6月中旬

- ある日、カエルのことをもっと知りたくなった子どもたちに、園長がカエルに詳しい方を紹介した。子どもたちは、カエルのおじさん（三重大学の河崎道夫先生）を山に案内した。カエルの卵を採って触らせてもらう。「フワフワ」「触ってもつぶれない」など、なんとも言えない手触りに感動する。
- カエルのおじさんは「育てる事が出来るなら連れて帰り、子どもたちを守って欲しい」と、隠れの森に住むモリアオコさんが言っていると言い残して帰って行った。そこで子どもたちは、カエルの卵を園で守ることにする。



❖ 卵からオタマジャクシが生まれる

- タライの中に入れて大事に守っていた卵。ある日の朝タライを覗いて「あっ産まれてる」とSちゃん。Aちゃんが「おタマちゃん産まれるー」とみんなに伝える。
- その声に子どもたちが様子を見に来た。小さなオタマジャクシを見て、「かわいいー」とFちゃんと、Kちゃん。見つめる子どもたち。卵の泡の中では、まだタライの中に落ちていない生まれたてのオタマジャクシがウニョウニョと動いている。「すごいねー」「小さいねー」「いる、いるー」と、間近で見ることができ、驚いたり感動したりする。
- 図鑑で調べてみると、オタマジャクシのごはんは、パンだということが分かる。次の日から早速、「ごはんもってきたよー」とAちゃん、Nちゃん、Bちゃんが家から食パンを持ってきて、ちぎって水槽の中に入れる。子どもたちは、オタマジャクシがパンを食べる姿も観察することができ、「食べたー」と大喜びする。



❖ 保護者からのお便り

- カエルのことについて、クラス便りなどで伝えると、こんなお便り（ノート）がきた。「寝るときの本はこども図鑑を持ってきて、カエルのところとイモリのところを読んでと言ひ少し読んでみました。『明日この図鑑を持って行ってSくん、先生に見せる』と言っていました。なんだか楽しいことになっているんですね」

❖ カエルの成長を見る

- 毎日のように水槽の中の水を交換したり、ごはんをあげたりと大事に育てていると、オタマジャクシに足や手が生えてくるのを見ることができた。
- 3分の2の子どもたちは夏休みに入ったが、オタマジャクシが、カエルになったため、夏休みに全員で1日集まって山に返しに行った



❖ 冬になってもオタマジャクシがカエルにならない?? 12月

- 冬になってもまだ、足も生えず、カエルにならないオタマジャクシがいた。子どもたちと図鑑を調べて、餌がパンだけではダメかと、鯉節や赤虫もあげてみた。子どもたちは今までと変わらず、世話を続けたが保育者の中には、「いつになったらカエルになるんだろう?」という疑問が湧いてきた。そこで、子どもたちと一緒に、卵と出会った山に散歩に行き、水槽の様子を見た。

保育者：「どうなってる??」と聞くと

Sちゃん：「いない〜」

保育者：「オタマちゃんたちどうなっちゃったんだろうね」と言うと、

Kちゃん：「いもり大明神が食べちゃったんじゃない?」「カエルになったんじゃない?」

保育者：「じゃあ、カエルさんたちどこ行っちゃったんだろうね」

Bちゃん：「この下じゃない?」（葉っぱを指さして）

Mちゃん：「葉っぱの下」

そんな話をしていると、急にSちゃんが、「冬は寝てるんだよ」と言う。

Tちゃん：「えー冬は元気になるんだよ」

みんな、分からなかったらしく、冬はどのように過ごしているのかを家で調べてくることにした。

翌日、「図鑑持ってきたけど、書いてなかったー」といって図鑑を見たり、

Sちゃん：「図鑑あって調べたら、寝るって書いてあったー」

Cちゃん：「寝るーお母さんに教えてもらった」などと、家で何人かの子どもがそれぞれ調べたり、聞いたりしてきた。

❖ 冬…どうする?? 絵本を読む

それでも、まだ疑問がのこっている様子だったので、カエルの絵本を読んでみることにした。冬は冬眠をするということが分かったみんな…。

Cちゃん：「もうすぐ冬だよ。だってCの誕生日近いもん」

保育者「もうすぐ冬ってことは、カエルさんたちはどうしようか…ここで寝れるかな」と聞くと、「寝れない」

保育者「じゃあみんなはどこで寝る?」

子どもたち：「暗いところ」「電気消す」

保育者「じゃここはどうかな?」

子どもたち：「明るい」「寝れない」

すると、Sちゃん：「カエル逃がせばいいじゃん」

Gちゃん：「逃がさないと死んじゃうよ」

Mちゃん：「返した方がいい」と言う。全員で返すことに決め山に向かっていった。そして、大事に大事に育てたカエルとお別れした。

✦ 振り返って

- 子どもたちの興味・関心を引き出し、考えたり試したり、調べたりする活動は、子どもの科学的思考の育ちに大きな意味をもつと考えている。子どもが自然現象や社会現象のちょっとしたことに誰かが疑問をもったら、それを契機にどうしてそう思ったか、どうしたらその疑問が解けるかをみんなで話し合ったり、本で調べたり、だれか分かりそうな人に聞いたりなど、日頃からいろいろな試みをする姿がある。この実践でも、モリオアオガエルのことに詳しい方を園に招待したり、家の人にお便りを通して状況を報告したり、図鑑を調べたり、子どもの興味を広げるように働きかけてきた。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「(C)公益財団法人 ソニー教育財団

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」